

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ローマ滞在日記④ ＊日本に抑留されたイタリア人フォスコ・マライーニ＊

二宮 大輔

2015 年は京都とフィレンツェが姉妹都市になって 50 周年にあたり、京都でも関連イベントが開催された。両都市の関係に欠かせないのが、民俗学者フォスコ・マライーニだ。1903 年フィレンツェで生まれ、1938 年に家族とともに来日。北海道大学でアイヌについて研究し、続いて京都大学でイタリア語の教鞭を取った。2004 年に亡くなるまでに多くの著作を残しているが、特に 1957 年に発表した『随筆日本』は、イタリアにおける日本研究の金字塔として今も名高い。

そんな彼だが、第二次世界大戦中、とんでもない逸話を残している。1943 年 9 月、イタリアが連合国に降伏すると、失脚したムッソリーニは、ドイツ後ろ盾のもと、同年 11 月に北イタリアのサローに政府を樹立。これに忠誠を誓わない在邦イタリア人は、敵国人とみなされ、日本政府によって捕らえられた。元来ファシズムに反対していたマライーニは、一家五人で名古屋の強制収容所に送られる。そこで特高警察から受ける劣悪な扱いに耐えかねたマライーニは、翌年 7 月、自らの小指を切り落とし、その怒りを表明する……。

私はこのエピソードを聞いたとき、心底おどろいた。名古屋に強制収容所があったとは。そして、マライーニが小指を切り落としてしまうほどに、捕えられた人々の扱いは酷いものだったと推察できる。一体どのような建物で、どのような生活を強いられていたのだろうか。まさか日本にもアウシュビッツのような場所が存在したというのだろうか。

想像を膨らませていた矢先、私の疑問の大部分に回答してくれる本の存在を知った。2015 年 3 月に刊行された望月紀子著『ダーチャと日本の強制収容所』だ。ご存知の方も多いだろうが、ダーチャというのは、フォスコ・マライーニの長女で、後にフェミニズムの旗手としてノーベル賞の候補にもなる大作家だ。両親とともに日本に着いた 1938 年、彼女は二歳だった。それから九歳になるまでを日本で過ごし、当然、家族とともに強制収容所も経験している。本書では幼少時代のダーチャの言動を再現し、その過酷な体験が「解放」を訴えるダーチャの作風の原型をつくったと論じている。それゆえ、強制収容所の場所や様子、捕らえられた



ダーチャと
日本の強制収容所
望月紀子

未来社

【「ダーチャと日本の強制収容所」未来社、2015】

イタリア人の生活について、フォスコの妻、ダーチャの母であるトパーツァの日記をもとに、克明に記述されている。

まず強制収容所の所在は現在の名古屋市の天白区。百貨店松坂屋の社員保養寮として使われていた木造二階の建物を日本政府が接收し、イタリア人たちを収容した。ここで断っておきたいのだが、イタリア語の資料では強制収容所(campo di concentramento)となっているこの施設は、日本では「抑留所」と呼ばれていた。一般的な強制収容所のイメージは、捕虜が過酷な労働を強いられる場だが、それと抑留所はどう違うのか。邪推すれば、負のイメージから逃れるための、日本政府の狡猾な命名法にも思えてくる。何を持って「強制収容所」と呼ぶのか、その定義を改めて考える必要があるように思う。『ダーチャと日本の強制収容所』では、十分な食料が与えられず、ゴミ箱をあさったり、野生の蛇を捕まえて食すエピソードが描かれている。寒さや体調不良など、かなり厳しい環境に置かれていたことはわかるが、敗戦間近の日本ではやむを得ない気もする。太平洋戦争初期、主にイギリス人、アメリカ人の抑留を行っていた神奈川県では、被抑留者に対する食料の配給が、一般の日本人よりも多かったという証言もある。抑留所が強制収容所と同義だとは一概に言えない。それに加えて、天白においては、イタリアが日本との同盟を裏切ったという感情的な部分で、イタリア人に対して特高が厳しい態度をとったという一面もある。やはり、実態を把握するために、さらなる判断材料が必要だ。

手始めに、正確な所在を確認しようと、天白図書館に連絡してみた。すると1956年に出版された『天白村誌』に抑留についての記録があると教えてもらった。抑留所となった松坂寮の場所は、天白村大字八事表山。「味方であったイタリアは途中寝返りをうったため、軍部はただちに同国人約20名を捕らえた」とのことだ。ここで敢えて話を脱線させるが、事実とは少し異なる記述が気にかかる。先述した通り、イタリアが連合国に降伏したのは1943年9月。マライーニ一家含む19名のイタリア人は「ただちに」捕らえられたわけではなく、降伏後に樹立したサロー共和国に忠誠を誓わなかったために捕らえられたのだ。『天白村誌』の記述では、あらゆるイタリア人が選択の余地なく捕

らえられたような印象を受ける。

閑話休題。続いて『ダーチャと日本の強制収容所』を読み進めると、天白のイタリア人たちが、度重なるアメリカ軍の名古屋空襲の後に、豊田市にある広済寺に移送されたという記述があった。さっそく広済寺に連絡してみると、取材に応じてくれるとのこと。折に触れ、新聞やテレビから取材を求められるようで、写真やマライーニ直筆のスケッチブックなどの資料も揃っているらしい。当時を理解する上での貴重な材料になるはずだ。これはいよいよ現地に赴かなければならない。かさむ費用と迫る原稿締切を顧みず、電話をした翌日、私は始発の新幹線に乗って愛知県に向かった。

時間の都合上、まずは豊田市からコミュニティーバスに乗って広済寺へ。イタリア人の移送先に広済寺が選ばれた訳は定かではないが、当時のお寺には珍しく英語ができる人間がいたかららしい。バスでたどり着いたのは、自然に囲まれたのどかな山村。名古屋市内の戦火から離れたこの地で、マライーニの心は大いに安らいだことだろう。事実、広済寺滞在は、マライーニにとってむしろ好ましい体験だったようだ。歴史ある寺院に接することは、日本を研究するマライーニにとってまらなく嬉しかったろう。当時の住職の妻が、本堂でのお務めの後、特高の目を盗んで幼いダーチャたちにお供えもののお膳をこっそり与えてくれたりもした。監視下にあったものの、天白と比べると、かなり生活が楽だったことが、さまざまな資料からわかる。その事実を裏付けるように、マライーニは戦後も二度、広済寺に赴き、1945年当時に置いていった自らのスケッチブックに署名して、再訪できた喜びの意を表している。

だが、ここでも一つ齟齬があった。「解放後、フォスコさんがうちの前で撮った写真は見られましたか」と現在の住職・酒井泰俊さんに尋ねられた。1945年当時の住職から数えて、ひ孫に当たる人だ。尋ねられた写真のことなら知っている。お寺の前でマライーニ一家五人が揃っている写真だ。写真が掲載されていた『ダーチャと日本の強制収容所』のキャプションには「東京、1945年。解放後のマライーニ一家」と記載されていたのだが、酒井さんの話では東京ではなく広済寺の本堂の前らしい。今は建て直されて雰囲気は違うが、確かに現在の本堂と写真の本堂はよく似ている。

『ダーチャと日本の強制収容所』を出版した未来社の担当編集者に問い合わせたところ、問題の写真が撮影されたのが東京ではなく広済寺かもしれないと自覚しながら、イタリア側の資料に従って「東京」としたのだという。イタリア側にもこの懸案を伝えているが、返事はもらっていないらしい。『天白村誌』もそうだが、日本側もイタリア側も、少し注意すれば簡単に気付いたはずの間違いをあっさり見逃している。歴史とは、間違えることがかくも容易いのか。現代社会に向けられたそんな警告を、改めて痛感させられた。



【広済寺 現在の本堂】

広済寺取材に続いて、天白区に行ってみた。名古屋が見下ろせる小高い丘にあった松坂寮は、戦後、松坂屋の手に戻り、現在では某工務店の社員寮となっている。町をぐるぐる回ってようやく辿りついた寮は、もちろん木造二階建てではなく、コンクリートでできたスタイリッシュな建築物だった。確かに地区の勾配は急で、丘とも呼べる場所にはなっていたが、基本的にはなんの変哲もない住宅街で、前方の家に遮られ名古屋を見下ろすことはできなかった。強制収容所時代の面影は皆無だ。

歴史とは、間違えることも容易いが、消し去ることはもっと容易い。日本の強制収容所は、主に教会や学校、寮などを借りたもので、ユダヤ人根絶を明確に掲げたアウシュビッツのような性質ではなかったのだろう。確実に暴力的な側面もあったように思うが、時期や場所によって被抑留者の扱いに差はあったことも加えて言いたい。そして大いに問題なのは、これを「強制収容所」と呼ぶかどうかという以前に、それを検証する材料が現在

の日本にはほとんど残っていないということだ。

愛知での取材は、大いに考えさせられたし、その意味で収穫があったように思うが、どこか核心を射止めきれなかったという印象がある。天白寮なき今となってはそれも仕方がないのだが、地道な取材とインタビューの蓄積によって、より細部まで当時の様子が見えてくるような気がしている。また、今回は勇んで愛知まで行ってしまったが、抑留前、フォスコ・マライーニは京都大学で教鞭をとっていたのだ。望月氏の著書によると、京都の飛鳥井町にある赤レンガの洋館でマライーニ一家は暮らしていたという。灯台下暗し。ここ京都にも当手を再現するための材料がたくさん転がっているのかもしれない。

(元当館語学受講生)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

7月より開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

7/1(水)11:00～12:30 7/4(土)11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

6/29(月)19:00～20:30

● 大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

6/22(月)11:00～12:30 6/22(月)19:00～20:30

イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

6/27(土)15:00～(各人30分ほど)

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

7/4(土)11:00～12:30

ポルトガル語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

7/1(水)13:00～14:30

『素晴らしき自転車レース 21』

滋養強壯と栄養補給

谷口 和久

自転車レースは、数あるスポーツの中でも特にエネルギー消費の激しいスポーツだ。プロのレースともなると、1日に6,000から7,000Kカロリーを消費するといわれる。

一口に7,000Kカロリーといってもイメージがわからないが、ごはんお茶碗一膳が約150Kカロリーなので、お茶碗にして40~50膳ほど。とても1日に食べられるような量ではありませんね。

ちなみに、同じ持久系スポーツのマラソンは、1回のフルマラソンで2,000から3,000Kカロリーといわれている。競技時間が異なるので—マラソンは2時間あまりだが、自転車は6~7時間におよぶ—単純比較はできないが、いずれにせよ自転車レースが厳しいものであることにはかわりはない。

なかでもジロ・ディ・イタリアやツール・ド・フランスなどのステージレースとなると、このような過酷な状況が1か月近くも続くので、選手にとって食事や栄養補給は最重要課題だ。これがうまくいかないと、「ハンガーノック」と呼ばれる、いわゆる低血糖状態となり、体にまったく力が入らない状態となる。

時々レースを見ていると、それまで調子よく走っていた選手が急にガクッとスピードダウンして、後続にどんどん抜かされていくシーンを目にする。たいがいハンガーノックが原因だ。トップ選手といえども、しばしば補給に失敗して、このような状況におちいってしまう。

では、自転車選手たちはどのような食事を摂っているのか。カロリーが高ければなんでもいい、というわけではもちろんなく、体に良くて効率的にエネルギーとなるものでなければならない。

史上最強のレーサー、ベルギーのエディ・メルクスの語る所によると、自転車選手が避けるべき食べ物として、「油で揚げたもの、ソーセージや

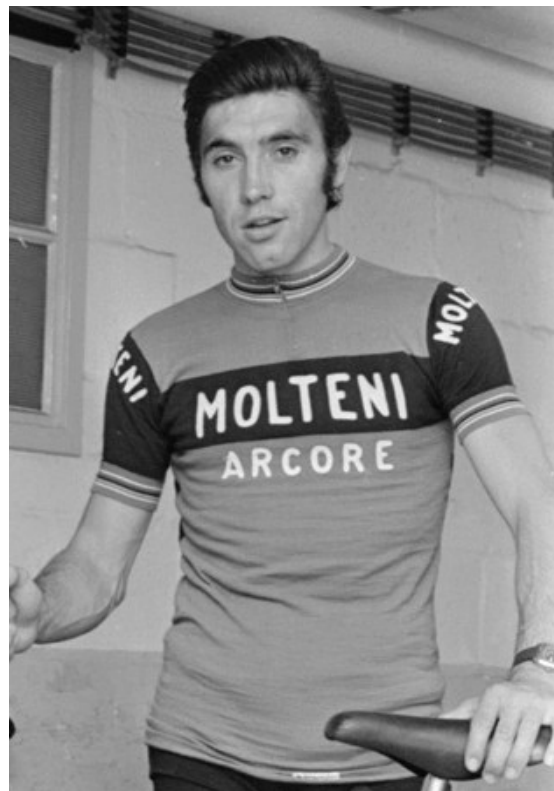
サラミのたぐい、極端に辛いもの、ごてごてしたケーキ、アルコール、過度に冷たい飲み物」（「自転車ロードレース教書」より）とある。ただ、当のメルクスが所属していたチームが、「ソーセージやサラミのたぐい」を製造しているイタリアのモルテーニ社“MOLTENI”がメインスポンサーだったのだけだ。

一方で、メルクスはドキュメンタリー・フィルムインタビューで、次のような言葉も残している。

インタビューアー「（メルクスの食卓にケーキがあるのを見て）自転車選手がケーキを食べてもいいのかい？」

メルクス「（ケーキを口にしながら）ケーキは別に悪くないよ。悪いのは、坂を登ることさ」（“La Course en Tete”, 1974 より）

そのへんの人間がこんなことを言ってもまったく格好がつかないが、通算成績500勝を誇るメルクスの言葉となると、なんとも味わい深い。



【モルテーニのジャージを身にまとったメルクス】

画像出典: http://it.wikipedia.org/wiki/Eddy_Merckx

走行中にとる補給食は、今でこそいろいろなサプリメントが発売されて、味はともかく、栄養的に事欠くことはない。だが、これも80～90年代からのことで、それ以前はパンにハムやチーズ、ジャムやハチミツをはさんだものや、バナナやリンゴなどの果物が一般的であった。ザバイオーネなどの甘いお菓子も食べられたそうだ。

1920年代のチャンピオン アルフレード・ビンダは、1925年のジロ・ディ・ロンバルディアで、走りながら28個の生卵を食べて優勝を飾った。この時、2位の選手には28分の差をつけて勝利したので、「卵1個で1分のアドヴァンテージ」とまことしやかにいわれた(もちろん、たまたまです)。

これらの栄養補給は空腹を感じてからでは遅く、走りながらこまめに行わなくてはならない。水分補給もしかりで、のどの渇きを感じてからでは脱水症状がかなり進んでしまう。

だからというわけでもなからうが、昔のレースの映像を見ていると、沿道のレストランや食料品店に選手たちがわらわらと押し入って、飲み物や食べ物を強奪(!)している様子もしばしば見られる。これはチームのサポートがさほどオーソライズされていなかったせいもあるかもしれない。

それと、沿道の観客からミネラルウォーターのボトルを受け取るシーンも2000年代の初めごろまではよく見られた光景だが、昨今はドーピングの問題もあるので、見ず知らずの人間からなにか受け取ることもなくなった。熱狂的な観客たちとの交流のようにも見えて、楽しいシーンではあったのだが、本当に世知辛い時代になったものだ。



【水を差し出す観客 2002 ツールにて】

また、驚くべきことだが、昔のレースでは走行中にアルコールをとることもあったようだ。たとえば、アメリカの文豪ヘミングウェイが1920年代のパリで自転車レースを見物した時の様子を次のように記している。

レース終盤、その猛々しいまでのスピードにいちだんと弾みをつけようとしてか、頭をぐっとさげて、レース・シャツの下に装着していたボトルのゴム・チューブからチェリー・ブランディを吸っているのが見えた。

(「移動祝祭日」より)

実際、アルコールは疲労回復や気つけ薬のたぐいとして重宝されたようだ。これは補給食ではなくレース後の疲労回復法について書かれた内容だが、パンのかたまりをワインにひたしたものが疲労回復に効果的、といった記述もみられる。

アルコールはもちろん現在では禁止薬物となっている。アルコールはともかく、「気つけ薬」のたぐいは、とくに2度の大会を契機として、自転車選手たちの間にも広まっていった。

ことにアンフェタミンをはじめとした興奮剤は「バクダン “Bomba”」とよばれ、疲労がたまって力が入らないときの着火剤として重宝された。

ファウスト・コッピとジーノ・バルタリがテレビの歌番組に出演した際、デュエットでこんなかけあいをしている。

コッピ 「Giri d' Italia ne ho vinti tanti / senza mai prendere droghe eccitanti (ジロでは何度も勝ったものさ。一度もクスリをやらずにね)」

バルタリ 「Giri d' Italia lui sì ne vinceva / ma le prendeva, oh, se le prendeva! (そう、彼はジロで何度も勝った。でもクスリをやったんだよ。そう、やったのさ!)」

歌い終わって、してやったり顔のバルタリと、「このオヤジめが・・・」といったげな表情で苦笑いのコッピ。youtube でも見られますので、興味のある方はぜひ視聴してみてください。

<https://www.youtube.com/watch?v=kgucQiW1Af8>

ドーピングが取り締まられるようになったのは、ツール・ド・フランスでも1966年からのことで、それ以前はもちろん「よからぬこと」という共通認識はあっただろうが、そこまで厳格に糾弾すべきものとはみなされていなかったようだ。

70年代ごろまではドーピングといえば興奮剤のたぐいであつたが、80年代以降、血液の酸素運搬能力を高めるもの（自己輸血や血液製剤等によるもの）が広まっていき、いまだに大きな問題となっている。血液ドーピングは摘発も難しく、また体への悪影響も甚大なので、より悪質性が高いものだ。マルコ・パンターニやツール連覇（後に剥奪）のランス・アームストロングらが使用していたのもEPOとよばれる造血ホルモンである。

そのうち、遺伝子組み換えや再生細胞によるドーピングが行われる時代がやってくるかもしれない。コンピューターウイルスといっしょで、いつまで

もイタチごっこの世界で、ファンとしても失望するしかないのだが。現役の、そしてこれからの選手たちが、クリーンに活躍することを願うばかりだ。

[参考資料]

- Daniele Marchesini, *L'Italia del Giro d'Italia*, il Mulino, 2009
Pier Bergonzi e altri, *100 anni di Giro*, Vallardi, 2009
『移動祝祭日』（アーネスト・ヘミングウェイ著、高見浩訳、新潮社、2009）
『ツール百話』（安家達也著、未知谷、2003）
『自転車ロードレース教書』（砂田弓弦著、アテネ書房、1992）
『自転車チャンピオン』（ルイゾン・ボベ著、三田文英訳、未知谷、2005）
『マルコ・パンターニ 海賊の生と死』（ベッペ・コンティ著、工藤知子訳、未知谷、2009）
wikipedia 関連情報

（当館スタッフ）

— ミラノ万博だより ① —

志賀 真奈

5月1日、ミラノ万博が開幕しました。直前まで会場工事の大幅な遅れが指摘されていましたが、無事にオープンを迎えました。

開幕前日の4月30日には、ドゥオモ前にて前夜祭が行われました。今回の万博のテーマソングを歌っているテノール歌手アンドレア・ポッチェッリ、世界的に有名なソプラノ歌手ディアナ・ダムラウ等による、イタリアオペラがメインのクラシックコンサートで、テレビのRAI 1でも中継されました。

演奏の合間には、万博出展の各国パヴィリオン映像も流れ、開幕直前の高揚感と盛り上がり伝わってくる、とても素敵なコンサートでした。

今回の万博は、約150ヶ国が参加し、「食」がテーマになっています。

各国がそれぞれの食文化を興味深く紹介するパヴィリオンを持ち、風土料理を食べられるレストラン等も併設されています。

日本館は出展国の中でも最大規模のパヴィリオンで、伝統文化と最新技術を巧みに融合させ、日本の素晴らしい食文化を、様々な視点から紹介しています。

開幕の5月1日は、あいにくの雨模様で、少し肌寒い一日でしたが、たくさんの方が来場しました。

その後も連日、多くのゲストで賑わっています。5月という季節柄、イタリア内の小・中学校の遠足で訪れている子供達も多く、楽しそうな笑顔が会場内の至る所で見られます。

10月31日まで続く食の祭典。ミラノ旅行をお考えの方は、ぜひ足を伸ばしてみられてはいかがでしょうか？

（元当館スタッフ）



編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>